

AIが映し出す「環」

わたしのパンデミック生活は、人工知能（AI）とともに始まった。新型コロナウイルスが日本にやってきたころ、わたしの頭の中に人工知能が研究対象として芽生えた。歴史学や北米研究の中でメディア技術について研究してきた私が、AIの分野に飛び込むのは無謀かとは思いつつも、

ながらも、AIに関する書籍や論文を読みあさるステイホームの時間を得た。マイノリティ研究への関心から、特に社会的マイノリティの生活においてAIはどのような影響を及ぼしているか、考え始めている。ここでは、いくつかの論点に触れたい。

歪みの伏在と再生産

ただでさえ周縁に置かれている社会的マイノリティにとっては、デジタル技術によって可能になる包摂は、孤立や孤独を解消し、自己肯定感を獲得するためには重要な変化である。逆に、デジタル技術によって、マイノリティが排除される構造がさらに強まることは、絶望感をもたらす。デジタル技術の開発に関する報道は、往々にして企業による商品紹介など利便性を強調するものが多いため、報道も前向きになりやすく、過去にできなかったことができるようになったという新規性が脚光を浴びることがほとんどだ。

AI技術の社会実装に関する報道言説も、基本的にはこのシナリオを踏襲している。ドローンによる無人配達や過疎地への物流を支援する。コロナ禍でマスクしたままでも顔認証ができる技術が安全管理のために使われる。塾がAIを活用して生徒の最適学習メソッドをカスタマイズする。このように社会への善を強調する報道が多い。

こういった報道の中に効率的な人事採用、人事異動のためのAIソフト開発が含まれ、この市場は着実に拡大している。過去には海外で人事採用のためのAIが問題となったことがある。エンジニア職に男性ばかりを採用していた過去の歴史が実績データとして入力され、女性はエンジニアに不向きと歪んだAIの学習になり、女性エンジニアが雇用されにくいバイアスをAIが実践していたことが判明した。国内でも就職支援企業が採用内定辞退率を算定し、企業にそのデータを販売していたことが問題になった。そのようなAI技術の運用リスクがあるにも関わらず、採用AIについての報道は今でもおおむね肯定的である。このように、社会のさまざまな場面に埋め込まれている差別、偏見、そして格差の構造が、アルゴリズムによって無意識に再生産されうること、そしてそれが社会的マイノリティのさらなる差別助長につながることは直視したい。

AIの技術発展による南北問題も起きている。

YouTubeなどの動画共有サイトでは、不適切な画像のチェックのためにAIを導入している。グーグル社が2020年4-6月期に削除した1140万件のうち、99.2%はAIによる検知だったそう。このように不適切動画の学習と検知精度の向上が目覚ましいAIも、ときには最終判断のために人間の目が必要になる。グーグル社だけでもこの不適切画像の確認作業をする人間

を一万五千人雇っている。精神的な負担が重いこの仕事は、アメリカでは過酷な労働として裁判沙汰になり、企業側が敗訴したことがあった。その結果、労働者の権利が弱く、精神的負担が労災保障対象に含まれていない南アジアの国々へ、この仕事が行われている。このような労働者の搾取は、AIをめぐる南北問題を如実に表している。

インクルージョンのためのAI

マイノリティ研究の視点からは、AIによってかき立てられる情動の研究にも注目したい。対人コミュニケーションが苦手な人にとっては、AIアバターが安心してコミュニケーションを取れる存在になりうるかもしれないと期待がふくらむ。地方に住む性的マイノリティの人が、同じ性的指向の人と出会う機会がなく、孤独感を感じながら生活を送っていたのなら、同じ指向の当事者意識を持つようカスタマイズされたAIアバターがいれば、帰属感、自己肯定感を得るすべになるかもしれない。

社会福祉の分野では、生活支援を必要とする人への最適な支援方法を算出するためにAIを活用している地域がある。カリフォルニアでは、路上生活者の状況に応じて最適な住居支援方法をアルゴリズムがはじき出し、限られた支援資源をより効果的に配分すべく、持続性のある支援のあり方を追求する取り組みがある。人海戦術では限界を見る包摂の取り組みも、AIを用いることでより広く社会的マイノリティと寄り添うことが可能になる。これこそAIの十八番（おはこ）であるべきだ。

労働への影響

AIの開発や社会実装が進むにつれ、「人間の仕事がロボットにとって代わられてしまうかもしれない」という悲観的な語りをよく目にする。20世紀初頭に工業オートメーションが加速したときは、「技術開発が人間の労働時間を縮減してくれる。いずれは(週休1日ではなく)週休5日さえ可能になるかもしれない」という楽観的な言説があった。働きたいのに機械に仕

事を奪われる人。技術のおかげで労働から解放される人。

北米などでアンチワーク（Anti-work）という運動が広まりつつあるそう。ミレニウム世代を中心に、レジャーを最大限優先し、働くことを拒否する運動である。Reddit上のアンチワークのフォーラムは、2020年の秋には17万人の登録しかなかったが、たったの1年で170

万人に膨れ上がった。同様に、中国の若者の間で「躺平族（とうへいぞく）」が増えているそうで、この若者たちはカネの奴隷にはならず、生きていくために必要な金のみを稼ぐ「横たわり」重視の姿勢を指しているようだ。

このような労働感やレジャー感を持つ人たちは、AIをはじめとするさらなる技術革新によって実現される「労働からの解放」を人一倍、期待しているからかは定かではない。しかし、この人々が将来的に社会保障制度の恩恵を十分に受けられなく、社会の周縁に追いやられてしまう危険はある。働きたくても働けなかった氷河

期世代の私たちが肌感覚で記憶していることだ。

AIのもたらす功罪を考えると、介在している人間がどのように情報を操っているかを省察せずに評価はできない。デジタル情報技術の生態環境に息吹くAIは、より広く人間社会の生態系や情報の循環体系を含む「環」を映しだす。AIを怖がるのではなく、工学系、社会科学系や人文系の仲間とも手を取り合い、AIを介して映る社会の脆さを千思万考できればと思う。



板津木綿子（いたつ・ゆうこ）

[専門] 歴史学、マイノリティ研究

[主たる著書・論文]

「レジャー研究と人工知能の交差領域－論点と可能性」『余暇ツーリズム学会誌』(8) 2021年3月 43-52頁.

「食と移動の文化史：主体性・空間・表象をめぐる抗い」板津木綿子編著 彩流社 2021年.

"Leisure in Desperation: The Alliance and Axis of Rhetoric in the Global Recreation Movement, 1930-1945." 小澤智子編『ジャパニーズネスは太平洋を越える／超える』彩流社, 2019年, pp. 167-203.

[所属] 東京大学大学院情報学環教授（総合文化研究科から流動）

[所属学会] American Studies Association、日本アメリカ学会、余暇ツーリズム学会、人工知能学会